

# みんなのポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

焼畑展示の誕生とその影響＜基幹研究：  
データベース「焼畑の世界：  
佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開  
>

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2022-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009950">https://doi.org/10.15021/00009950</a>

# 焼畑展示の誕生とその影響

池谷 和信

## 焼畑展示がつくられるまで

近年、日本各地で焼畑が注目されている。たとえば焼畑を利用して商品用のカブを生産する山形県鶴岡市、地域おこしの一環としてソバを生産する静岡県井川地区や熊本県水上村、学校の授業として焼畑体験がなされる熊本県五木村などである。焼畑は、4-5年間の栽培の後に畑を放棄する点、肥料や除草剤を使用しない点などから、循環型の自然にやさしい資源利用としてみなされてきた。また、水田稲作はモンスーンアジアを中心にみられるのに対して、焼畑は日本や世界の熱帯地域で現在でも維持されている農耕である。焼畑は、森林破壊の要因とみられて禁止される国がある一方で、人類の食料獲得の1つの方法として今も欠かせないからである。

筆者らは、このような動向を踏まえて2022年3月10日から6月7日までの約3カ月にわたって民博で企画展「焼畑—佐々木高明のみた五木村、そして世界へ」を開催した。民博と熊本県五木村が共催するこの展示には、4年余りを準備に費やした。

まず、焼畑研究者の元・民博館長の佐々木高明が1960年前後を中心に撮影した写真を整理して、館のデータベース「焼畑の世界」として公開することから始め（池谷 2021a）、五木村では現地セミナーを開催した。数多い昔の焼畑関連の写真をセミナーで村人に見てもらったところ、幸いにも好評であったため、2020年秋に五木村の博物館で民博との共催の展示を行うことが決まった。中心となるのは佐々木の写真であったが、村との協働作業の結果、焼畑経験者を巻き込んで民具や古文書なども展示することになった。



佐々木高明の等身大のパネルを展示（2022年、筆者撮影）

今回の民博での展示は、五木村の博物館での展示を継承しながらもさらに発展させたものである。民博の来館者が、はたして焼畑の展示に魅力を感じてくれるかどうか不安のうちに開幕したが、焼畑文化をめぐる一般の理解と関心を高める効果ができたと実感している。以下では、焼畑展示の内容を紹介すると同時に、展示の社会的影響について具体的に述べてみたい。

## 展示の空間構成

展示にあたって、まず筆者らは五木村のなかの焼畑経験者のみならず狩猟関係者にも協力を呼び掛けた。焼畑を農業そのものであるという見方よりも森の資源利用の一コマとしてみたかったからである。村民の1年の暮らしをみても、焼畑はイノシシやシカの狩猟、ニホンミツバチの養蜂、タケノコの採集などが組み合わさっていた。しかも、ソバの花にはミツバチが、タケノコにはイノシシが集まるように、それらの生き物のあいだにはつながりがみられた。さらには、森には山の神さまがいるなど、人びとの信仰面とのつながりも無視できなかった。

そうしたことから、今回の展示では五木村を中心に焼畑の民の文化を人類史的に捉えて（池谷 2021b）、民具・写真・映像を併用して総合的に伝える方針を採用した。民博の企画展示場を5つの空間に分けたのは、このためである。それらは、(1)佐々木高明の研究履歴、および焼畑とは何かを伝える導入部、(2)焼畑の民の末梢の女性の暮らし、(3)五木村の人類史、(4)国内外の焼畑文化の地域比較、(5)焼畑と現代社会とのかかわりである。以下に、テーマごとの展示空間を解説する。

(1)「佐々木高明の見た焼畑」では佐々木のフィールドノートや手書きの原稿を紹介する。そのうえで、1年、5年、20年という時間スケールの違いに応じて焼畑を漫画家によるイラストの助けを借りて定義づけた。また、焼畑のかかわる食べ物レプリカや色あざやかな在来作物の種子も展示した。

(2)「最後の焼畑の民」では、現在の五木村に生きる女性の暮らしが民具や写真や映像をとおして紹介される。彼女は20年ほど前に焼畑をやめているが、焼畑時代の作物を現在まで常畑で栽培して在来の種を維持してきた。とくに、この展示空間では、来館者に彼女の生き様を伝えるにはどうしたらよいかを考えた。そのため、展示品はすべて彼女から借用



木おろしのなかで樹木間を移動する（2022年、筆者撮影）

したものを用いた。彼女の家に続く道のスマホ映像は来館者に強いインパクトを与えるものとして欠かせなかった。また、民具の使い方なども映像で紹介した。

(3)「人の移動と環境適応」では、五木村の2万年にわたる歴史を中心に紹介した。縄文土器、弥生土器、江戸時代の古文書や絵図など、村から借用したものが並んでいる。五木村では弥生土器が出土しているから、当時の焼畑の可能性をうかがえるが、その真相の解明にはさらなる発掘調査が必要である。また江戸時代の資料より、焼畑地の面積や木下ろし文化の存在を知ることができる。

(4)「五木村からモンsoonアジア、そして世界へ」のコーナーでは、五木村の焼畑とは作物が異なるラオスを中心とした焼畑を、伐採、火入れ、播種、除草、収穫に分けて紹介している。ここには、川野和明の収集資料を借用して展示した。それらは収集地の詳細と民具の民族名がわかるので、ものの収集地の地図が作成できた。さらには、多くの人の協力で国内外の焼畑にかかわる写真が展示でき、世界の焼畑分布を俯瞰的に示せた成果は大きい。

(5)「現代社会と焼畑」のコーナーでは、パネル展示が中心となった。中学生の焼畑体験をパネル写真で、また文化祭でのその報告を映像で紹介できた。最後に、五木村の産物、地球環境と焼畑、SDGsと焼畑、文化多様性と焼畑のように、現代社会における重要なテーマを分けて紹介した。

## 展示がもたらした新たな関係

今回の展示は、いったい何をもたらしたのであろうか。まずは、来館者のみならずセミナーや映画会などのイベントに参加した人びとと五木村の人びとが、焼畑文化をめぐってつながった点である。展示に関わるアンケートには、期間中に280件の意見が寄せられた。このなかには、焼畑を初めて知った、それへの見方が変わったという意見も数多く、企画側にとっての大きな喜びとなった。なかでもおばあちゃんの暮らしや木おろし作業の復元展示、中学校の活動の紹介などは印象に残ったようだ。

暮らしのコーナーが過去ではなくてあくまで現在の状況を伝えていること、木おろし作業の立体的な再現展示は高く評

## 池谷 和信（いけや かずのぶ）

国立民族学博物館人類文明誌研究部教授。専門は環境人類学、人文地理学。著書に『トナカイの大地、クジラの海の民族誌—ツンドラに生きるロシアの先住民チュクチ』（明石書店 2022年）、『人間にとってスイカとは何か—カラハリ狩猟民と考える』（臨川書店 2014年）などがある。

価された可能性が高い。ただし、その場所で流していた木おろしの歌の歌詞からは、山の神とのかかわりがうかがえにくく、その点をうまく伝えられなかった点は反省点である。

また、展示品を貸与してくれた側からの反応も興味深い。展示は五木村のものが中心であったが、1点（木おろし竿）のみ宮崎県西都市の神社からの借用があった。宮司さんはこの竿の意味がまったくわからなかったが、山の文化の再評価につながってくれたと、展示の報告にうかがった際に喜んでくれた。伝統は継承するのみではなく現代とのつながりが大切であるのご意見もいただいた。一方で、五木村の狩猟関係のものを狩猟の名手に返却にいくと、病床に伏せていて高齢化により今後の伝承が危ぶまれている現状を肌で感じた。

## 民博焼畑展示の意味すること

冒頭で述べたように今回の展示は、五木村の人びととの過去4年間の協働作業のたまものであり、まさに本館が進めるフォーラム型展示の一環である。現地での資料収集および広く関係者との対話から企画側の焼畑文化像を協働して再構築する作業が不可欠である。企画側は、何を伝えたいのか。多様な資料をどのように統合させるのか。今回の展示は、民族誌、人類史、比較民族誌、現代社会論などの視点から分析した総合的な成果である。筆者は狩猟採集民研究を専門にしているので、そこからみた焼畑像であった。焼畑が水田稲作より狩猟採集に近いという認識を出発点として、狩猟と同様に地球環境との関わりの視点からみようとしたのはそのためであり、ここに斬新さがある。とはいえ、今回の展示では焼畑の特徴とされる10-20年の循環の方式を十分に証明できたわけではなかった。

以上のように、数多くの人びとの協力のもとに成立した本展示は、焼畑文化の真の姿を伝える機会になったと自負している。今回の展示は図録を作成できなかったかわりに、この展示をどのように記録に残すのか、展示を契機として人の輪が広がることでさらにみえてきた焼畑の世界を明確に表現していきたいと思っている。

## 引用文献

- 池谷和信 2021a「五木村での『佐々木高明の見た焼畑』展—フォーラム型展示の可能性を探る」『民博通信 Online』3: 4-5。  
—— 2021b「佐々木高明の見た焼畑—五木村から人類史を構想する」『季刊民族学』177: 4-13。